1964　作品ナンバー
0057·0058·0059

アメリカの家庭生活〔三部作〕

記録
35ミリ
カラー

■企画
貯蓄増強中央委員会

スタッフ
■製作
村山英治
大西雅夫
■脚本・演出
村山英治
■撮影
小松　浩
加藤和郎
■編集
沼崎梅子
■録音
岡崎三千雄
■音楽
原田　甫
■解説
川久保　潔
（第一部、第二部）
小山田宗徳
（第三部）

第一部　子供のしつけ〔32分〕
第二部　おかあさんの仕事〔28分〕
第三部　アメリカの若い農家〔31分〕

文部省特選
〔推薦〕
優秀映画鑑賞会
青少年映画審議会
中央児童福祉審議会
農林省（第３部）
第19回芸術祭奨励賞
1964年度教育映画祭最高賞・企画賞
第13回東京都教育映画コンクール金賞
1964年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第１位
第19回毎日映画コンクール企画賞

〔現地協力〕
ルウス・マシウス
オズボン美智子
ウィスコンシン大学農村社会学科

アメリカの家庭生活は、いったいどんなものか、アメリカ人の生活の中に入って、彼らから学ぶべき点、すぐれた国民的な伝統を探し求めた映画である。この映画を通して戦後の日本人の生活を考えてみたいという作者の意図があった。当時、欧米ではプライバシーがおかされるのをきらい、家庭の中にはカメラが入れないといわれていた時代であった。

第一部「子供のしつけ」

まずアメリカの中流家庭を訪ねてみる。アメリカを象徴するニューヨーク、その郊外の高層団地アパートに住む若いマーフィーさん一家。アイルランド系移民の２世で夫は27歳、妻は26歳で２人の男の子がいる。若い母親が「狭いアパートに暮らすかぎり、子供に散らかすなといってもムリ」と、一緒に楽しく本をひらいて遊んだあと、必ず片付ける習慣をつけている。子供のしつけのコツを聞くと「愛情と常識です」と答えた。夫のダニエルは建築の現場監督だが、もっと勉強して収入の多い地位につこうと、勤めが終わると大学の夜学に通っている。

次に、アメリカの家庭生活の根底になっているキリスト教と開拓者精神のふるさとのひとつ、コネチカット植民地のあとを訪ねてみた。ウッドベリーという静かな町で、今は近くの都市の郊外住宅地に変わってしまっている。このウッドベリーの開拓農民の家に育ち、シカゴの近郊エバンストンに住むウィルさん一家を訪ねた。彼らはマーフィーさん一家の５年後を思わせる姿でもあった。ウィルさんたちは、それまでのアパート住まいから、念願の一戸建ての郊外住宅に移ってきたばかりで、余暇があるとその古い家の模様がえを家族全員でしていた。父親のウィルさんは「子供のしつけは親から学ぶもので、本を読んで身につくものは１割ぐらいなものだ」といい、「いま、小さな子供を厳しくしこむのは、それが身について将来楽しく仕事ができる人間にしてやりたいからだ」という。「自分たちの子供の頃は、近くに農民はもとより鍛冶屋とか、大人のさまざまに働く姿を見て育った。しかし、今の子供は、親の働く姿を知らない」と、休日出勤の日には、小学２年の長男を職場へ連れていき、終日、自分が仕事をするそばで遊ばせていた。ウイルさんは、シカゴの建築設計会社の設計技師だった。家の修理の大工仕事などは「自分がやった方が速いのだが」といいながら小さな息子に手伝わせていた。７歳の少年には電気ドリルの振動を抑さえるのがやっとだったが、ウィルさんは大きな体を曲げてその幼い手元をのぞきこんでいた。もっと子供が大きくなり欲しいものがふえてくると、親は買ってやるかわりにどうしたら手に入るか相談にのって、そのために子供が働くことを激励してやる。自分の手でえた小さな経済の中で、子供たちの独立心や働く習慣が培われていく。

第二部「おかあさんの仕事」

アメリカの堅実な中流家庭には規律がある。合理性といってもよいもので、そのひとつに主婦の家事のやり方がある。昔は月曜は洗濯、火曜はアイロンかけ、木曜は買い物、土曜は大掃除などと、１週間の予定はかなり厳格に決まっていたようだが、今は電気洗濯機、掃除機などが現れて家事も次第に短時間で片付くようになって、昔の習慣は崩れてきた。

オーティスさんは、「家事は女にとってもいやな仕事だが、やら

なければならないことなので合理的に片付けて、半日でも１日でも解放されるためには、やはり計画性が必要」という。そのやり方にはアメリカの主婦の合理性が如実に出ていて、ムダのない働きぶりである。行き当たりばったりではなく作り出した余暇を使って、例えば子供を育てあげてから再就職したり、老後の生活のために婦人学級へ行って勉強したり、人によっては教会で社会奉仕の仕事をしたりしていた。サンフランシスコで、ある婦人学級をのぞいてみると、技術を身につけて働こうという中年の主婦、特に老婦人の姿が目立つ。

家庭生活の大事な一環として老後の生活も訪ねてみた。定年で引退した老人たちは、郊外の静かな住宅地から賑やかな町の盛り場に集まってきて余生を送る傾向がある。子供たちが巣立ってしまうと、郊外生活は家の修理も掃除も厄介になる。車の運転も面倒になって、町の中でないと暮らせなくなる。ダウンタウン（下町）だと、ちょっと歩けば何でもある。パートタイムの勤め口も結構ある。老人たちは思い出の多い郊外の家を売って、そのお金と社会保障などで、盛り場の古いホテルやアパートで余生を過ごしていた。さらにサンフランシスコ郊外の老人ホームも訪ねてみた。

第三部「アメリカの若い農家」

アメリカ中西部のウィスコンシン州の農業は大農場によるものではなく、家族中心の酪農で日本の人々には親しみやすい。特に興味をひくのは、両親は歳を取ると家も農場も息子夫婦にまかせて、引退農民として近くの町で暮らす風習があることで、その際、父と子は一種の小作契約を結ぶ。息子は、銀行から借金して農機具全部と家畜の半分を父から買い取り、父親は、農場と農場施設、住居、家畜

の半分を出資して、収益は折半である。息子は自分の取り分の農業収益で、少しずつ父から農場を買い取っていく。そして遂には、農場を完全に自分のものとする習慣である。息子は若い力にまかせて働き、経営を拡大していく。デントル家でも、父と子は小作契約を結び、父親は引退して毎日古ぼけた自動車を運転して町から通ってきて、気ままに手伝っていた。息子のデントル君は30歳、妻が28歳で５人の子供があり、近々もう１人増える予定だ。彼は23歳の時、4H クラブで妻と知り合って結婚した。経営耕地は約80ヘクタール、その他に牧草地約40ヘクタール、30頭の肉牛、乳牛を26頭、豚120頭、鶏500羽を飼っている。しかし、妻はこの辺の風習で（元を尋ねると北欧の農村の習慣で）畑仕事には出ず、家事と育児に専念している。農家の暮らしは第一次世界大戦後、自動車が普及し馬耕からトラクターにかわり、急速に都会化した。

デントル農場についでその20年後を思わせる農家も訪ねた。50歳近い自作農のダムダイさんで、父の死後農場を均分相続で引き継いだ母親や妹の相続分も今は買い取って楽な暮らしぶりであった。しかし、経営規模は日本よりはるかに大きいが、生活は意外に質素である。ダムダイさんには州の大学へ通う娘が２人いるが、２人が嫁いだあとは農業はやれるだけやって農場を他人に売るという。子供を育てあげた40代、50代の農家の主婦の50パーセントは家計を助けるために勤めに出ている。掃除婦、売り子、看護婦、秘書等、ほとんどがパートタイムである。

ダムダイさんの10年後を思わせるロイ・パーテルさんは、60歳。２人の娘は嫁いでしまい、広い家には老夫婦２人で、いよいよ農場を売りに出すという。こうした農場の売り物が地方新聞の広告にたくさん出ていた。アメリカでは、農家の長男でなくても農業が好きなら農場を始めるチャンスがあるが、最近は農業もますます機械化し大きな資本がいるようになって、以前より若者が農場をはじめることは難しくなってきたという。